

⑧手助けはほどほどに！

子どもが小さいうちは、着替えや食事などさまざまなことを手助けしています。小さいうちは、発達の段階としてできないことが多くあるためです。発達が気になる子どもは実際の年齢より幼い場合があるので、毎日の生活において保護者や先生のさまざまな手助けが必要となります。

「手助け」には、4つの種類があります。

「パジャマのボタンをはめる」という例で説明します。

『パジャマのボタンをはめる』

手や腕、体に直接さわる

例 上から手を持ってボタンをはめてあげる

見本を見せる

例 「先生がやってみるから見てね」と言って
ボタンを閉める見本を見せる

言葉のヒント

例 「一番上のボタンだよ」と言う

視覚的なヒント

例 「ボタンをはめる」絵カードを見せる



手助けは、その子に合ったものを選びましょう。耳からの指示を理解することが苦手な子どもに、言葉のヒントを出すのはどうでしょうか？絵カードのような視覚的なヒントの方が理解しやすいかもしれません。

発達が気になる子どもに対しては、小さい子どもに接するように何でも助けてしまいがちです。何でも手伝っているといつまでたっても1人でできるようにはなりません。常に、1人でできるようになっているのかどうかを確認して、徐々に手助けを減らしていきましょう。子どもが「1人でできるようになること」を目指しましょう。



ルール⑧：手助けはその子に合ったものを！

そして徐々に減らしていきましょう。

